

江戸時代末期の老人とその家族構成  
お茶の水女大家政 中野洋恵

目的 一般的には時代がさかのほればさかのほるほど老人人口比（全人口の中で老人の存在する割合）は小さくなっていると思われているが、この仮説は昭和初年までしか当てにならない。また、老人たちの家族構成も昭和34年以前は明らかにされていない。そこで、本研究では江戸時代末期の老人人口比を明確にするとともに、同時期の老人の家族構成について分析することを目的とする。

方法 江戸時代末期の一部である天保年間（1830年代）における『越前国宗門人別御改帳』に記載された4集落についての戸数と成員を資料として分析した。江戸時代の身分社会の原理から、支配者（武士）と被支配者を合算することは公約には不可能であったため、ここで分析したものは庶民人口のみに限られている。

結果 ①当時の高齢基準である満60歳以上を老人として算出すると、平均10.4%でありかなりの高齢化社会であったといえる。ただし65歳以上で算出すると20%であった。この比率は昭和42年頃のものと等しい。②老人のいる家の家族構成は子や孫と同居している者が95.6%を占め、ひとり暮らしは3.3%、夫婦で暮らしているのは1.1%であった。③老人がいる家は、天保3年には平均50%を越えていたが、大飢饉後の天保9年には30%を割っていた。などが明らかにされた。